

おいしいは愛しい

プロにおハナシ聞いちゃいます!
おしえて人
シゴト人



俳優・タレント
森崎博之さん

1971年11月14生まれ。北海道東川町出身。演劇ユニット「TEAM NACS」のリーダーで、北海道を拠点に活動している。HBC番組「森崎博之のめぐり王国北海道」に出演し、メインMCとして北海道の食とその重要性を発信。自身の2人のお子さんに食の大切さを伝えている。ほかにもラジオのパーソナリティーやコラムの執筆、講演会などマルチな活動をしている。



▲笑いと気づかいで、場をなごませてくれる森崎さん。

17歳新聞

2015
6月
[第18号]

編集新聞局員

責任者	第18号編集長	宇佐美 舞
	顧問教諭代表	横山 学
編集者	谷口 志帆	葛西 愛理
	小倉 幸恵	大丸 音々
	竹内 終人	
特別記者	演劇部員	
	畠中 紗彩	庭山 菜摘

取材協力



学び伝える食と命

「めぐり王国北海道」は毎週土曜日の17時から17時30分に放送され、タレントのオクラホマさんとHBCアナウンサーの佐々木佑花さん、「めぐりっこ」と呼ばれる小学生と一緒に道内各地の農業や酪農の現場を巡り、食の大切さを楽しく伝えている番組である。森崎さんは北海道で収穫される食材について幅広い知識を持つ「北海道フードマイスター」の資格を持ち、昨年、北海道米をもっとアピールしたいと、お米の食味検査や評価を行う『ご飯ソムリエ』の資格も取得した。

今年3月に「1年を通じて酪農を学ぶ」という新企画シリーズが始まり、本校2年の砂押祐貴子さんと藤村七海さんが出演。釧路にある仁成ファームで子牛の1年間の成長を見守りながら「食」と「職」を体験している。森崎さんは「僕たちが食べている野菜や肉にはすべて命があつて、その命を自分たちの命に変えさせてもらっている。そんな思いも視聴者に伝えていくつもり」と語ってくれた。



▲3月の番組ロケ前日に生まれたメスの子牛。2人の名前と頭文字をとって「ユナ」と命名。

LOVE崎さん

撮影現場はとにかく明るくユーモアにあふれている。番組の進行役を務めるのは、黄色のつなぎを着る佐々木佑花アナウンサーで、全道各地の美味しいお店をたくさん知っている森崎さんを「歩くグルメマップ」と呼んでいる。また、「○○崎さん」というニックネームも流行っている。野菜や果物を切るときは「切り崎さん」、料理を取り分けるときは「分け崎さん」。和気あいあいとした現場が、番組の温かな雰囲気をつくっているのだから。



▲つなぎの色は赤が森崎さん、緑がオクラホマの藤尾さん。相手の河野さんと入れ替わりで出演。

『女子高生よ、米を食べえ!』

私たちは健康でいるかぎり、食べ物を食べない日はない。しかし、女子高生はダイエットを意識してしまうもの。お米は糖分や油分が非常に少なく、私たちの胃袋にとってもよく合う消化のいい食べ物だ。森崎さんは「痩せたいなら、朝はお米を食べるべき」という。

そんな私たちに森崎さんは「生きることは食べる」と話す。食卓につくとあたりまえのように料理が並べられるが、それは作ってくれる人がいるからだ。料理に使われている食材は農家などの方々が一生懸命に育てたもの。だからこそ、食事をするときの「いただきます」「ごちそうさま」には感謝を込めて、食べることを大切にしたい。

大地のお刺身

森崎さんは北海道東川町で生まれ、祖父母が農家だったので、おやつは採れたてのきゅうりやトマト。野菜の素材をそのまま味わっていた。スナック菓子にうらやましさを感じていたが、今思うと「贅沢な境遇だった」と感じている。

森崎さんは番組のロケを終えて、ファミレスで注文した「ステーキセット」が印象に残っている。スープや肉は美味しかったが、付け合わせのブロッコリーの鮮度と味の悪さに驚いた。そんなとき、後ろの席にいた子どもが母親に「ブロッコリーは体に良いよ」と食べさせられている光景を見て、「今すぐ北海道の畑にこの親子を連れて行き、採れたてのブロッコリーを食べさせてあげたい!」と思ったそう。



▲番組史上初の高校生『めぐりっ娘』。森崎さんは番組の「リーダー」としてサポートする。

第66回 学園祭 ～テーマ：BRILLIANCE(輝き)～

一般公開 7月11日(土) [9:00～14:00]

HR発表(3年模擬店など)・文化クラブ発表・パフォーマンス甲子園など

“新聞? 見てるよ、テレビ欄。” そんな人も、新聞局
～人と出会い、人に伝える新聞～

「17歳新聞」つくりたい生徒募集!

詳しくは横山先生または局長の宇佐美まで

バックナンバーは学校ホームページ「新聞局クラブ紹介」に掲載中!

もっと「めぐり王国」を知りたい!
そう思ったらこちらにアクセス!

<http://www.hbc.co.jp/tv/aguri/>



魅力全開北海道

北海道で生まれ育った森崎さんにとって、道民の魅力は農地や自然と同じような『広く大きな心』という。「心をひとつにして、みんなが良く見えるものをめざして向かっていく」といったスピリッツを北海道に感じるそうだ。



▲HBCは2014冬のラジオ聴取率北海道No.1。キャラクターの「もんすけ」は「あぐり王国」にも登場し、クイズを出題する。

マルチなチカラ

東京にはたくさんのプロが集結している。しかし、北海道にはプロの数が少なく、舞台の裏方や宣伝なども自分でする必要がある。そのため、何でもこなせる力がついたそうだ。「人材育成の場として北海道は優れている。マルチになれる」と語る。脚本や演出など、北海道でたくさん経験を重ねてきたからこそ言える言葉だろう。

HBCラジオでも番組を持っている森崎さんは「あぐり王国では真面目な話をしているけど、ほかの番組ではくだなくてエッチな話もするんだ。自分のバランスを保たせてもらっている」と等身大で話してくれた。自分をマルチな人間にしてくれた北海道を愛している。



©CREATIVE OFFICE CUE

TEAM NACS 紹介

メンバーは北海学園大学演劇研究会出身である森崎さん、安田顕さん、戸次重幸さん、大泉洋さん、首尾琢真さんの5人。北海道のパラエティ番組から全国放送のドラマまで、ひとりひとりが個性を生かした活動をしている。NACSの名前は、森崎さんが演じた「ノックス」という登場人物に由来する。森崎さんの発音が「ナックス」に聞こえたためだそう。

原点はここから

演技に興味を持ち始めたのは大学1年のとき。演劇研究会の部長が可愛くて入部を決めた。先輩は4人だけだったが部員を27人まで増やし、その中で今のメンバーたちと出会った。森崎さんの初公演の観客は20人。とても悔しい思いをしたので、大学の演劇研究会のほかに所属していた劇団「イナダ組」と協力しながら活動し、最終的には千人が集まる舞台になったそうだ。大学卒業後は就職のため上京したが、演技への情熱を忘れられず、北海道に戻り、役者として食べていくことを決めた。

役者の心得

役者として大事にしていることは「役を作らない」こと。自分の中でイメージを組み立て、脚本家や舞台を見る人の気持ちになり、セリフを口に出すことで「役ができあがる」。高校や中学の演劇は性格分析をしてしまいやすい。その役のイメージを作ると、ありきたりな演技になってしまう。上手くセリフが言えなくなる。「自分が脚本の中に溶け込んでいかな」と役作りは難しい」という。

本番は「力を入れずに平常心でいきたい」と、ステージに出てからではなく、袖幕からスイッチを切り替える。この瞬間を自分のものにするために、出る前はあまり喋らないそうだ。だが、そんな森崎さんの様子をみたメンバーはよくイタズラをするため、切り替えられずに舞台上に立つてしまつこともある。おかげでリラックスできるそうだ。

ぼくらの保護者へ

今年の夏、3年ぶりの舞台『悪童』が上演される。演出がマギーさん、脚本が古沢良太さんという有名な方々が担当する。一部のファンの中には「脚本や演出も5人でやっている舞台がTEAM NACSなのは」という意見があるそうだが、森崎さんはファンに、いろいろな形のTEAM NACSも見せたいと思っている。「新しい人とやる舞台は楽しみでもあるし、愉快である」と無邪気に話してくれた。

5人にとってファンの存在は絶対だ。「ファンは僕らの保護者。いつまでも心配をかけるオッサンたちでいたい」と笑顔で話す。長年にわたる応援し続けてくれるファンが多いからこそ言える言葉だ。森崎さんはTEAM NACSは80歳までやると約束している。「白髪が生えて歯が抜けたとしても、一緒に歳をとっていききたい」。その言葉に深い愛情を感じた。

そんな5人が出演する舞台『悪童』は、7月15日の大阪からスタートし、9月6日の東京公演まで全国8ヶ所をまわる。札幌公演は7月30日から8月2日まで、わくわくホリデーホール（札幌市民ホール）で行われる。



愛は広大

「僕はTEAM NACSのことを一番愛している。だからリーダーなんです」。札幌を拠点に演劇活動していた駆け出しの頃は、演劇で生計を立てるために、たくさんの人に見てもらえる劇団にしたい気持ちがあった。そのため、「俺の言うことを聞け！」とメンバーの先頭に立ち、今とは全く違うリーダーだった。しかし、それは本当のリーダーではないことに気づいた。今では5人の名前が全国に浸透し、個々の活動が多くなっている中、森崎さんは北海道のレギュラー番組を多く持っている。そのため、地元に戻ってきたメンバーを迎える立場だ。「北海道は僕たちの家。僕はこの家を一番愛しているから、家を守るお母さん」。この心意気は「あぐり王国」でも変わらない。番組を一番愛しているからこそ、メインMCなのだ。



▲頼れるリーダーの大きな背中。

あつハート

森崎さんは家でも「リーダー」と呼ばれている。奥さんからは「リーダー、ゴミ出してきて!」と言われるそうだ。「リーダーは一番できる人でなくていい。『あつたかく包んでくれる人』と言われたい。世話焼きだけど、世話を焼かれることも好き。ちゃんとしすぎでない自分だからこそ、リーダーという愛称を気に入っている。森崎さんは「北海道のために何かをしたい。何かしらのリーダーであり続けたい」という想いを膨らませている。「北海道のリーダーと言えは、森崎博之」。これが広く定説になる日が近いこと間違いなさだろう。

あとがき

大変お忙しい中、私たちの取材を受けてくださった森崎さん。生き生きとした目がとても印象に残っています。「元気の源は?」という質問に「北海道」と即答。東京で一日中スタジオにこもっていても、北海道の畑に来るとリフレッシュできるそう。「北海道の人と畑に支えられて仕事をさせてもらっている」。北海道への愛が伝わってくる名言を残してくれました。「生きることは食べることを心に置き、食べ物を食べられることへの感謝を忘れず、『いただきます』に気持ちを込めたいと思います。」

「これからたくさんの壁にぶつかっていくときがある。でも壁を越えたところには次の景色が広がっていて、壁をよじ登ったあとの爽快感は自分にしか味わえない。大人はそれを知っているから『頑張れ』って言うんだよ」と、高校生に向けてたくさんアドバイスをしてくれました。どんな質問にも快く、熱く答えてくださった森崎さんは、TEAM NACSのリーダーとして、俳優として、二児の父として、とても魅力的でした。森崎さんをはじめ、取材に協力くださったHBCの皆さま、写真を提供くださったタツクリエティブオフィスキューの皆さま、ありがとうございました。



キッカケ

小2ときに同級生に誘われ卓球を始めた。大谷卓球部は技術指導だけでなく、人間的に成長できるクラブという。チームの仲間や支えてくれる人たちに「結果を出して恩返ししたい」と日々練習に励んでいる。カット主戦型だが攻撃も鋭く、次世代のホープと注目されている。

海外からの刺激

世界ツアーの大会ではいろいろな国の人と交流できるため、技術面以外でも学ぶことが多いそう。海外の選手はパワーがあり、背も高く男子に近い卓球をするが、瞳さんは「海外の方がプレーしやすい」という。

夢へはばたく

今までの試合の中で、勝って泣いたことは2回だけ。中2のときに足の手術を受けた3日後に出場した中体連の地区予選と、中3のときの全国大会優勝である。「2020年の東京五輪に出場したい結果を残したい」と今後の目標を教えた。「うれし涙」を流す日を私たちが待ち望んでいる。

がんばる部員に聞いてみよう!
ブイonderビュー!

Hiromi Sato
佐藤 瞳



卓球部主将、高校3年生。6月現在、世界ランク39位(U-21で9位、U-18で3位)。2014世界ジュニア選手権に日本代表として出場し、団体準優勝に貢献。ワールドツアー2015では、ベラルーシ・フィリピン・オーストラリアの3大会でU-21優勝し、通算で5勝目をあげる。世界で活躍する注目の道産子アスリートである。

オオタニ高校のせんせいたちをご紹介します。

18 せんせいずかん

エイゴ科バスケット属
ヨネヤマ キョウスケ

- ▶生息地
サツエキのおしゃれな本屋
- ▶好きなもの
食べるラー油かけごはん
チェブラーシカ
- ▶座右の銘
Never say never
- ▶元気の源
生徒と交わすジョーク

